

平成 22 年度 築理会総会・懇親会報告

今年も総会が神楽坂校舎 1 号館 17 階記念講堂で、懇親会が 6 号館 1 階の談話室で 5 月 22 日(土)に開催された。「築理会をきっかけに、仲間の輪を広げ母校の発展に寄与しよう」をメインテーマに、参加者は工学部建築学科卒の同窓をはじめ、教職員の皆さん、現役の学生を含め 76 名にのぼり大変盛大でした。

総会終了後は、九州産業大学工学部建築学科 教授 小泉隆先生(1987 年卒)が「フィンランド 光の空間」～教会



建築を中心にレイシスカ、アールトの光の空間を紹介～をテーマに講演しました。多数のスライド写真を使用した講演は、光が建築の空間に重要な役割を持っていることが理解され、興味深いものでした。自らがフィンランドに滞在して撮影を

続け、本も出版しております。会場でも即日販売が行われ、皆さん買い求めておりました。今後のご活躍にも期待したい



と思います。懇親会場では直井先生、沖塩先生、伊藤先生、倉渕先生、郷田先生・・・等ご挨拶いただきありがとうございます。

ございます。昔話に花が咲き、同窓の皆さまとも楽しく歓談されておりました。会場の雰囲気は和やかなうちにフィナーレを迎え、恒例の校歌斉唱で一気に盛り上がりました。やはり、いつ会っても

同窓はいいものです。仲間であり、仲良しクラブです。来年も皆様の大量の参加を期待しております。(石神一郎=I部 70 年卒)



平成 23 年度 総会・懇親会のお知らせ

日 時 平成 23 年 5 月 21 日 (土)
総会・講演会 午後 2 時～
懇親会 午後 4 時～
場 所 東京理科大学神楽坂校舎



学生 × OB OG 交流会

逆風下の就職活動に 各分野の先輩たちが助言



11月21日、九段校舎の第五製図室で学生とOB・OGの交流会が開催された。設計事務所、建設会社、専門工事会社、不動産会社、公務員など、多種多様な分野から集まった卒業生は約30人。10月時点の大学生の就職内定率が57.6%という厳しい状況下で、後輩たちの就職活動をサポートしようと駆けつけた。

今年は昨年に続く第2回目の開催。建築学科のサポートを受ける形で設計事務所、建設会社、発注者と3つに分けて、各業界の先輩たちがそれぞれの業界の現状と求められる人材についてホンネで話をする構成とした。司会進行は昨年に続き、会報委員会の安達(86年卒)が担当した。

交流会に先立ち、学生を代表してりぼん製作委員会の山田和也さん(M1)がりぼん2010年版の完成を報告。「理本」と「リボン」をかけた、卒業設計集も今年で5冊目の発行。設計課題のページを増

量するとともに、カラー化を図り、内容もより充実させた。

交流会は設計事務所パートからスタート。先陣を切る形で1期卒業生の中村弘道さん(1966年卒)が「自分から進んで動いていく。アルバイトで入り込むとか、コネなども使って手を尽くす。そうすれば道が開ける」と激励の言葉を飛ばす。安井建築設計事務所の経営者である佐野吉彦さん(79年卒)は「採用はその場の勝負だが、日々の積み重ねがものをいう。ポジティブに取り組んでほしい」と話した。

自ら住宅設計を中心とする設計事務所を主宰する杉本由美子さん(2005年卒)は「設計の仕事をやめたいと感じることもあると思うが、やめないで続けることで設計の楽しさがわかるようになる」と実感を含めた。設計事務所を経営する武長龍二さん(76年卒)も「待遇だけを考えたら、設計事務所はこの仕事が好きでないと続けていけない。それでもがん



築理会の石神会長(70年卒)の趣旨説明から始まった交流会。参加してくれたOB OGは中村弘道(66年卒)、大岩昭之、福田義克、田中弘道(以上68年卒)、林孝夫(69年卒)、石神一郎、石橋利彦、椿康子、村田茂幸、古池廣行、日比野正夫、植野寿憲(以上70年卒)、三輪富成(73年卒)、武長龍二(76年卒)、杉田宏一(77年卒)、佐野吉彦(79年卒)、増村清人(81年卒)、真鍋喜嗣(82年卒)、宇野与四郎(83年卒)、佐藤浩(84年卒)、森清、信達靖(85年卒)、安達功(86年卒)、松浦隆幸(90年卒)、三浦博範(98年卒)、杉本由美子(05年卒)、大槻尚美(07年卒)の計27人。皆様どうもありがとうございました!



三部構成で進んだ交流会。設計・施工・発注といった建築にかかわる各分野のOB・OGが語るリアルな話に学生たちは熱心に聞き入り、メモを取る

ばろうという人にエールを送りたい」と言葉をつないだ。

建設会社では、ハザマ副社長の植野寿憲さん(70年卒)が、まず建設会社の仕事と現状について説明。建設

投資は80兆円から40兆円に半減しており厳しい状況にあるものの、海外などで知恵を使う仕事が増えている現状について自らの体験を含めた話をした。そのうえで「建設会社の仕事はなんといっても健康が基本。特にこれから増える海外の仕事は精神面でもタフさが要求される。身体を鍛えてほしい」と強調。竹中工務店の増村清人さん(81年卒)は建設会社の海外での仕事には、大きく分けてオフィスや工場など日系企業の海外進出をサポートする仕事と国際入札プロジェクトがあることを学生たちに説明したうえで「知恵を使って新しい価値を生み出せる人材が必要。安定を求める人は厳しいかもしれないが、チャレンジする意欲をもっている人が求められる」とアドバイスした。

ここで女子学生から「女性も現場監督としてやっていけますか?」という質問。これに対しては「体力などで厳しい面もあるが、コミュニケーションや調査・計画などでは女性のほうが長けている」「朝礼で女性が壇上に立つと一瞬にして作業員全員が静かになる」などOBたちから励ます言葉が送られた。学生に最も近い立場の大槻尚美さん(2007年卒)は、現地の測量から設計、各種申請などにおよぶダイワハウスでの日々の仕事をリアルに説明しながら、「学生時代には自分の好きなことは何かをしっかりと見つめてほしい。それが社会に出てからのよりどころになる」と話した。

交流会も後半戦に入ると各業界の収入など、普段はなかなか聞けない同窓ならではの話題も飛び出した。田中弘道さん(68年卒)は「企業社会はネット

ワーク社会。こういったOBのつながりを含めたコネクションを堂々と生かす。それから人がいやがる汚れ仕事を進んでやること」。福田義克さん(68年卒)は「デ

ベロッパでは新しい商品企画が求められる。新しいものを考えたいという人には向いているが、実現するにはネットワークとコミュニケーション力が必要」と話した。防衛施設庁の杉田宏一さん(77年卒)は、2年後に変わる公務員の採用形態などについて説明しつつ、ほかにないオールラウンドな業務にかかわることのできる公務員の仕事の魅力について話した。

全体の議論を見渡したうえで建築雑誌の編集者である森清さん(85年卒)は、建築学科卒業生が選べる進路の選択肢が格段に広がっていることを解説しつつ、社会に出て活躍するためには、コミュニケーション力、企画力、実行力、体力が必要であると強調。「社会に出て求められるのは頭のよさよりもコミュニケーション力。まず人の話が聞けること。相手が何を求めているかがわかる人が強い」と話した。

最後に交流会を締めくくる形で、女性であり地震調査会社の経営者でもある椿康子さん(70年卒)が、自分のもっているコネクションを生かし、地震応答解析という分野での仕事を自ら切り開いてきた経験を話しながら、「好きなことを貫くことが大事。自分に合ったものを見つけるための新しいスタートはいつでもできる」と学生たちに大きなエールを送った。

交流会は予定時間を過ぎるまで続き、続いて行われた懇親会には、学科の先生方も駆けつけてくれた。自分たちが希望する業界事情についてさらに詳しい情報を聞こうと、先輩たちの声に熱心に耳を傾ける学生たちで盛り上がった。

(安達功=I部86年卒、会報委員)



建築編集者の森さんは建設業界を俯瞰した視点から「単なる頭のよさよりも、コミュニケーションの力が大切」と話す



ハザマ副社長の植野さんからは、建設会社の現状と「健康が資本」という話。杉本さん、大槻さんの女性二人は学生たちに近い立場からアドバイス



交流会に続く懇親会では、自分の気になる業界のOBに個別に話を聞く学生の姿が。最後は林副会長の一本締めで、就職活動の成功を祈願した



現場へGO！（第7回）

今、最も注目を集める現場、東京スカイツリー。日に日に成長するツリーは毎日どこかでメディアを賑わしている。一方足元では延23万㎡の一大複合施設の建設が行われている。東街区作業所長大林組の駒形謙一氏（理工I部1975卒）を現場に訪ねた。

「東京スカイツリー」



東街区工事所長の駒形氏

今や東京のさまざまなスポットから望めるまでに成長したスカイツリー。それは3本の鉄道（東武伊勢崎線、都営浅草線、東京メトロ半蔵門線）と北十間川とが交錯する3.69haの敷地に立っていた。ツリーが注目を集める中、足元では東武鉄道が事業主体となる商業、業務、プラネタリウム、ホール、展示場、水族館、

各種学校などからなる一大複合施設の工事が進行している。中でも東街区の業務棟はスカイツリーがあるため控えめに見えるが最高高さ158m、31階の超高層建築だ。現場は平成23年12月竣工（24年春オープン）に向けてまさに佳境に入ったところである。

ところでこの現場には駒形氏以外にも多くの工学部・理工工学部のOBが働いている。東街区では内藤恵介（1992年）、藤原章洋（1993年）、藤田義哲（1997年）、松本孝史（2001年）の各氏、タワー街区では岩岡悟司氏（2006年）と計6名のOBが活躍している。

はじめにタワー街区副所長の杉本直樹氏より注目の



ツリー見上げ／第一展望台が見える

タワーの概要をお聞きする。まずは世界一の高さから、「ムサシ」つまり地上634m。第1展望台が350m 2000人収容、第2展望台が450m 800人収容。観覧者は4階から大

型（40人乗り）高速エレベーターで第1展望台まで上がる。第2展望台へはそこで乗り換える。ただし日本一の第2展望台2階へは外に張り出した螺旋のロープを自らの足で登らねばならない（設計者のこだわりとか）。タワーは1階正三角形、途中から正円プランとなる。当然のことながら部材は1本1本形状・サイズ・角度が異なる。ソリとムクリそれに心柱、五重の塔に見られる日本伝統工法の発想だそうである。多くの苦難の末、ほぼ鉄骨の組み立ては終わり、634mまで、芯柱の構築とゲイン塔のリフトアップを残すばかりとなった。

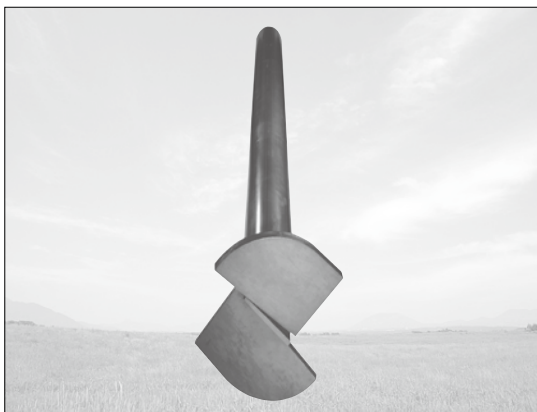
一方、駒形氏が担当する東街区は周囲を2本の鉄道と河川に囲まれているだけでなく、なんと敷地中央を都営浅草線が斜めに横断している。ここに地上31階の超高層オフィスとプラネタリウムを含む8階の商業施設を建設している。地下3階は押上駅と直結する。地下鉄都営浅草線



ツリーを背景に東街区オフィス棟

は地上近くを貫通しており、そのため施設は地下で2つに分断されている。しかも地下鉄の管理限界は水平・垂直方向各数mm、このあたりの地盤の悪さを考えれば、これだけで十分ご苦労がしのばれると言うものだ。敷地中央に立つと地下鉄の振動を体感できるほどだと笑う。

東武伊勢崎線には計測器を設置し毎日チェックが欠かせない。また落下物等の無いよう安全確認は最重要課題だそうである。最後に、有名現場を任されることの誇りや苦労について尋ねると、見られていることは安全管理などに必要な緊張感をもたらしていると締めくくった。（藤森正純＝I部71年卒、会報委員）



目に見えない支える技術こそが大切だと考える。

回転貫入鋼管杭ジ-・エクス・パイル
G-ECS PILE®

<http://www.sansei-inc.co.jp>

営業品目：建築工事における基礎杭の開発・販売・施工/建築工事における各種杭の技術提案

※ 技術開発スタッフ募集中

株式会社 三誠 本社 〒103-0015 東京都中央区日本橋箱崎町20番3号 箱崎公園ビル TEL:03-3639-5226 / FAX:03-3639-8162
関西営業所 / 北関東営業所 / 茨城営業所 / 新潟営業所
SANSEI INC. (昭和48年 工学部建築学科 代表取締役 三輪富成 ・ 専務取締役 小川ひろし 他2名)

10月31日(日) ホームカミングデー 2010in 神楽坂
—盛況のうちに終了—



歓迎セレモニー

ホームカミングデーの2週間ほど前から、南の洋上に発生した移動性低気圧が突然強い台風に変化した。この台風の進路によってはホームカミングデーを直撃する可能性が出てきた。しかしながら、当日は、朝方の10時ごろに雨がぱらついたが、終日曇りだったおかげで参加者の伸び足は良く3500名に達したと思う。回を重ねるごとに知名度が高まり、年々参加者が増加しているのではないのでしょうか。今年のホームカミングデーも和やかな雰囲気の中で多くの卒業生、教職員、父母、地域の方々にも多彩なイベントを楽しんでいただきました。



サイエンス夢工房

著名な先生方によるバラエティに富んだ記念講演は盛況

研究は楽しいものと語りかける藤嶋昭学長、聴衆に手や体を動かさせながら脳を上手にだますことを楽しく話す篠原菊紀先生、聴衆の気持ちを捕らえて離さない秋山仁先生。

会場は盛況で来場者たちは興味深く聞き入っていました。

新規・趣向を凝らしたイベントが盛況

今年は「はやぶさ～7年間の軌跡～展」が人気を呼んだ。移動プラネタリウムを1号館前の空地に設置し小宇宙を体験させるものです。直径5mのエアドームは宇宙を体感する宇宙船のようで太陽系の旅が楽しめました。30名定員で6回上演したが、入場整理券は早い段階で配布し終わってしまった。また、「はやぶさ～7年間の軌跡～」ミニ講演会も50名定員で5回、3号館3階の教室で開催したが、これも毎回満席で盛況であった。

百聞は一乗に如かずということで電気自動車の試乗会を開催した。3台の車で57名が電気自動車の乗り心地を楽しんだ。また、近代科学資料館では録音の歴史展で「エジソンとベルリナー昔の音を聴く」と「音の理科実験」の実演を行い、460名の入場者がありました。

昨年に引き続き人気のイベントであるサイエンス夢工房、キッズ・サイエンスライブショー、お笑い演芸



OBフォークバンド Mash☆Liquor

会など盛りだくさんのイベントが開催されました。(石神一郎=I部70年卒、ホームカミングデー企画実行部会長)



卒業20・30・40周年懇親会



子どもたちに
誇れる
しごとを。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設



活躍するOB

2010年4月、長谷工コーポレーションの社長に就任した大栗育夫氏（1部1974年卒）。同社として技術畑出身の社長は、創業者である長谷川武彦氏以来のことだ。11月上旬、東京・芝の本社オフィスで大栗氏にインタビューした。

創業者以来の技術系社長、リフォームの強化へ

週刊ダイヤモンド誌に、次期社長を予想する「人事天命」と呼ぶ名物コーナーがある。「長谷工コーポレーションには、営業系と技術系の専務がおり、どちらかが社長になるだろう」。このような記事を見て、まさに当事者だった大栗育夫氏は「これは覚悟しないといけないなと思った」と振り返る。前社長の岩尾崇氏からは、社長就任の1年ほど前から「お前、社長ができるか？大丈夫か？」と念を押されていた。満を持しての社長就任だったと言える。

「以前より忙しくなったかな」と大栗氏。生活のパターンは変わった。かつては設計部門の若手や現場所長を集めて飲みに行っていた。社外との付き合いで、そうした時間は限られるようになった。「しかし、私が社長になって技術系の社員が元気になったという話を聞くと、とてもうれしい」と顔をほころばせる。

大栗氏は理科大の学生時代、美術部での活動に力を注いでいた。「取り立てて成績が良かったわけではない。絵を描いて、遊びほうけていた。あまり真面目な学生ではなかった」と振り返る。ただ、当時から製図は好きだったという。「即日設計では、中身はともあれ、真っ先に仕上げて席を立てていた」と大栗氏は話す。

卒業研究の場として選んだのは真鍋恒博教授の研究室だ。研究室を決める段階で、真鍋教授からは研究の中身について何の説明もなかった。「僕は君たちに研究の仕方を教えよう」。こんな真鍋教授の言葉に興味を引かれた。卒業研究のテーマにしたのは「エキスパンションジョイント」。就職後も部材のデータを真鍋研究室に提供するなど、良い関係が続いている。

実は大栗氏は、設計事務所への就職が内定していた。周囲の仲間がいろいろな会社を受けているのを見て、もう少し就職活動を経験した方がいいと考え、会社の知識もなしに受けたのが、今の会社だ。「長谷川工務店（現・長谷工コーポレーション）を知っているか。株価がどんどん上がっている。これから伸びる会社らしい」。このような話を親戚から聞き、大栗氏は「ここだな」と感じたという。オイルショックで設計事務所の内定が取り消しになったのは、幸運にも長谷川工務店の合格通知をもらった後だった。

1974年に同社に入社。最初の1年は施工現場に配属されたものの、それ以降は設計畑を歩み続けてきた。まず手掛けたのは「コンバスシリーズ」という規格型



マンションの設計だ。ディテールは完成しており、同様の規格で建設していく。配置計画のほかは、エントランスなどしか工夫の余地がなかったという。「面白くないな」と大栗氏が感じていた矢先に時代が変わった。商品企画室を発足、マンションの企画をみっちりやって、それから設計をするような仕組みが導入された。

同室では、土地の情報が出たら、企画を立ててユニットプランまで検討。さらに、事業収支や売り値までシミュレーションして事業主に働きかける。「一つひとつコストまで踏まえて企画をつくる。これは面白いなと思うようになった」（大栗氏）。

バブル経済時代にはデベロッパーとして、ホテルやオフィスビルの建設まで会社が手を広げたのに伴って都市環境設計室長に就任。その後、訪れた「ゼネコン危機」では、いかに安く、利益が出るような設計・施工ができるか、委員会の委員長として取りまとめた。設計部門の責任者を経て、専務時代には技術全般を統括した。同社の設計を常にリードしてきた一人だ。

こうした華々しい経歴を持つ大栗氏だが、社長に就いてしばらくは戸惑いもあったと漏らす。最も苦心したのが財務戦略についてだ。「設計や施工など技術面に關しては、すべて自信を持ってこれで行け、あれで行こうと指示できた。今後は、前社長の岩尾会長にも相談しながら、責任者として全社の方向性を明確にしていけないといけない」と気を引き締める。

大栗氏が掲げているのは、新築と同様にこれまでのストックに注力することだ。マンションの施工実績は50万戸を数え、グループ会社で27万戸の管理を手掛けている。長谷工コミュニティーに置いていたリフォーム事業を子会社として独立させ、本格的に活動を開始した。「現場所長もその子会社に異動させ、リフォームや大規模修繕、耐震改修を獲っていくことを打ち出している」と大栗氏は説明する。

90年代半ば、倒産の危機にあった長谷工は前社長の岩尾氏が中心となって立て直しを図ってきた。2008年のリーマンショックで1年延長した中期計画は今、中間期にある。「右肩上がり成長していく会社にして、次世代に引き継いでいきたい」。大栗氏は力強い言葉でまとめてくれた。（森清＝1部85年卒、会報委員）

「色彩の世界 あきらめない」

みなさん応援してください
梅津 裕二（1部1974年卒）

浅野麻里（ペンネーム・セアまり）さんは15年前に建築学科卒業生である夫の浅野康寧さん（1部9期卒・設計事務所主宰）をがんで亡くしました。一人娘を育てながらその後、染織家として活躍していましたが、3年前に視力が急激に低下、医師から「いまの医学では治療法はない」と言われました。色の世界を奪われてしまい染織家としての仕事はあきらめざるを得ませんでした。失意のどん底からはい上がるきっかけとなったのが、盲導犬フリルとの出会い。以下は朝日新聞で紹介された麻里さんの記事の一部です。

（10月23日朝日新聞朝刊より）

「色の世界を奪われ、染織家としての生活はどうなるのか、生きていく意味があるのかと、心の闇にのまれそうだった」

闇から抜け出す契機をもらったのが、メスのラブラドルレトリバーの盲導犬フリルとの出会いだった。前向きで人なつっこい性格。「盲導犬は迷惑」と怒鳴りつけてきた男性にでさえ、ずっとしっぽを振り続け、男性を笑顔に変えてしまったこともある。

フリルと接することで、前向きな気持ちが生まれた。苦しくてもまた笑える日がやってくるかもしれない、人の心も柔らかくすることができるかもしれない、と思えるようになった。

「視力は失っても、色彩の世界に身を置き、想像力で心が温くなる話を書きたい」

そう思い立って書き下ろしたのが、フリルと自分自身をモデルにした物語だ。

舞台は2年前、実際にフリルと訪れた沖縄の海。目の光を失った「まり」が盲導犬の「ふりふり」と一緒に海に入り、自由に泳ぐ。まりが勇気を持って一歩を踏み出す様子を盲導犬の目線で描いた。

イラストは知人の紹介で、「13歳のハローワー

ク」などの作品で知られる絵本作家、はまのゆかさんに依頼した。柔らかな線と色が印象的だ。急いで作業を進め、浅野さんが視力をほぼ失う前の9月に絵本は完成した。

同じ障害がある人の助けになればと思って同時に作製したCDでは、登場人物の表情まで音声で説明し、波の音なども録音した。本を購入した視覚障害者で希望する人には、裏表紙にある応募券との交換で無料で進呈することにした。

「いま、生きることに苦しさを覚えている人にぜひ読んで欲しい。絶望から少しでも離れ、優しい気持ちになる手助けになれば、うれしいです」

（以上、記事原文のまま）



出版した絵本は「もうどうけん ふりふりとまり」セアまり／作。A4変型判、38ページで定価1200円（税抜き）、幻冬舎エデュケーション＝03・5411・6215。ネットでも購入できます。

麻里さん、これからもずっと絵本作家として活躍してください。みなさんもぜひ応援をお願いいたします。



平成21年度 1級建築士合格者

平成21年度も多くの東京理科大学卒業生の方が当学院講座を利用して合格されました!

東京理科大学卒業合格者187名中
総合資格学院
講習利用合格者 136名合格

東京理科大学
合格者占有率 **72.7%**

全国大学別順位 **第2位**

平成21年度

合格者占有率 **1**

1級建築士設計製図試験
全国合格者5,164名中、
2,767名が当学院受講生

当学院受講生 **53.6%** V2達成

※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。

総合資格学院 すべては「合格」のために

www.shikaku.co.jp 総合資格 検索

TEL: 03-3340-2810

開講講座

- 1級・2級建築士
- インテリアコーディネーター
- ファイナンシャル・プランナー
- 宅地建物取引主任者
- 1級・2級建築施工管理技士
- 構造計算コース(実務講座)

当世就職事情（学生の進路報告）

事務局 梅津裕二（1部 1974年卒）

景気低迷により企業の新卒者採用は縮小の傾向にあります。建築学科の就職状況を見てもこの影響を受け、これまでの進路傾向が変化していることがうかがえます。工学部1部学部生、修士大学院生の最近の進路状況についておおよその傾向をまとめてみました。

就職活動は年々早くなり、学部では専門分野がまだ決まっていない3年時の9月には実質的に動き出します。図1に最近4年間の学部生の主な進路を示しました。図中のその他は、設備、電力・ガス、IT、建材、デザイン・インテリアなどで多岐にわたっています。今年度は10月の時点で8割方の進路が決まっています。最近特に変わってきているのが大学院進学率で、進学希望も合わせると今年度は全体の63%になります。3年前から増えてきています。景気回復をみての就職先送りと見ることもできますが、大手ゼネコン・設計事務所が大学院生を指定採用する傾向にあることから進学率が増えてきているということもあるようです。また、景気を反映してか、不動産とハウスメーカーへの就職が減少しています。

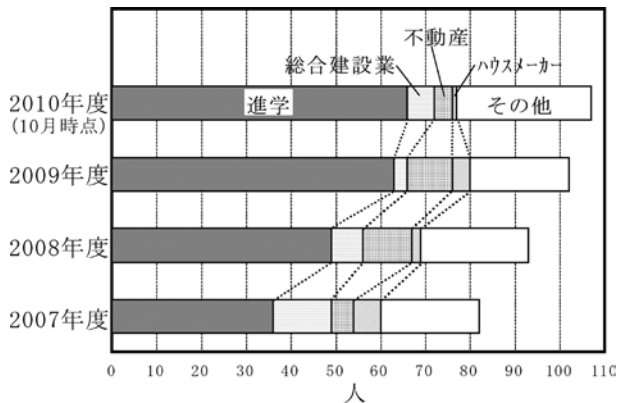


図1 1部学部生進路

図2は大学院生の、やはり最近4年間の進路状況です。総合建設業と設計事務所の比率の多いことがわかります。不動産と住宅機器は減少しています。

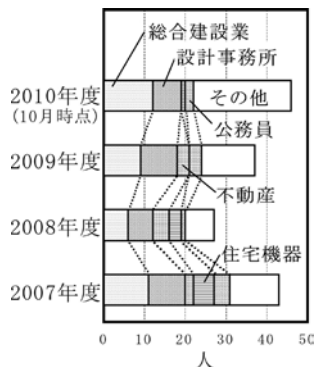


図2 大学院生進路

なかなか回復しない景気の中で、来年度に向けて学部3年生、修士1年生の就職活動が始まっています。以前のように早く売り手市場にもどって欲しいものです。

平成23年築理会新年会（第3回）のご案内

昨年に引き続き同窓の皆様が気楽に交流できる場として第3回新年会を開催します。同窓の皆様には何卒お誘い合わせの上ご出席賜りたく、ここにご案内申し上げます。

日時 平成23年1月26日（水）18時～20時

場所 東京理科大学森戸記念館1階会議室
東京都新宿区神楽坂4-2-2

TEL:03-5225-1033

参加費 3000円

◎ご出席の方は 会長 石神一郎 宛て1月12日（水）までに「氏名、卒業年次」をメールまたはFAXでお知らせください。メールアドレス godhopping@yahoo.co.jp
FAX:03-3400-1164



「編集後記」

活躍するOBでは、長谷工コーポレーションの社長に就任した大栗育夫さんにインタビューしました。11月21日に開催した学生との交流会には、ハザマ副社長の植野寿憲さんほか、各社で要職に就くたくさんの先輩方が駆けつけてくれました。交流会で何回も出てきた「コミュニケーション」「コネクション」という言葉を、同窓の輪を生かしながら広げていきたいものです。

(安達功 adachi@nikkeibp.co.jp)

築理会報 2010 秋号

2010年12月発行 Vol.46

発行所：東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学工学部I・II部建築学科
築理会事務局 03-3260-4271(内6674)
03-5213-0976(FAX)

編集長：安達 功

編集委員：石神一郎、大岩昭之、藤森正純、広谷純弘、森清、伊藤学、渋川克也、山名善之、平賀一浩、菊地宏、栢木まどか、深野有紀、大槻尚美、野村奈菜子

印刷発送：グローバルシステム株式会社